

10 ハンセン病と共に生きる（ハンセン病）

（ナレーター）皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、山田としあきがお届けします。タイトルは「ハンセン病と共に生きる」です。

沖縄生まれの作家、伊波敏男さんは、1957年、中学2年生でハンセン病と診断され、その翌日には一人、人里離れた遠くの療養所に入所させられました。すでに治療薬があり、患者には厳しい隔離政策がとられていきました。「恐ろしい伝染病である」との誤った情報が広がっていたのです。

【伊波さん役】療養所には中学校までしかありませんでした。

しかし私は進学したかった。当時、岡山の療養所には高校があつたため、相談を受けた自治会長は、親身になつて施設から出る方法を一緒に考えてくれました。私は脱走を決意し、父を説得して一緒に本土行きの船に乗りました。

船内で父は、私に毛布をかぶせて、両手にある病気の後遺症を隠しました。もしハンセン病だとばれたら、父は、私を抱えて海に飛び込むつもりだつたと後で知りました。決死の覚悟がなければ、ハンセン病回復者が外に出られない時代だつたのです。

たどり着いた岡山の療養所で、運命を変える医師に出会いました。高校を卒業することが人生のゴールだと思つていた私は、「社会復帰に備えて、手術を受けた方がいい」と、将来を考えた言葉をかけてくれたのです。望みを託して受けた1

2回もの手術の結果、手を動かせるまでに回復しました。高校を卒業後、社会復帰へ向けて専門学校に入る決

め、東京の療養所に移りました。入所者の自由な外出は、法律で認められていなかつたのですが、黙認する形で夜間の通学を支援してくれたのです。それでも常に手を隠して過ごしていましたが、「病気になつた君は何も悪くない」という友人の言葉に勇気づけられました。

35

(ナレーター)その後もさまざまに出会いがあり、ハンセン病回復者であることを隠さず生きると決めた伊波さん。現在は、執筆のかたわら、積極的に講演活動を続けています。

40

【伊波さん役】理不尽な差別に疑問を持ち、私のことを大切に思い、行動してくれた人たちのおかげで、今の私があります。若い皆さん、目の前の偏見や差別に流されず、考え、自ら動く人になつてください。そうして、誰もが生きやすい社会を一緒につくつていきましょう。

45

(本文948字)